

琉球大学学術リポジトリ

戦後沖縄とアメリカ ―異文化接触の総合的研究―

メタデータ	言語: 出版者: 山里勝己 公開日: 2010-02-24 キーワード (Ja): 沖縄文化, 異文化接触, 国際文化論, 比較文化, アメリカ文化 キーワード (En): Comparative Analysis of Culture, Cross-Cultural Contact, American Culture, Intercultural Studies, Okinawan Culture 作成者: 山里, 勝己, 我部, 政明, 仲程, 昌徳, 高良, 鉄美, 石原, 昌英, 吉田, 茂, 小倉, 暢之, 等々力, 英美, 宮平, 勝行, 喜納, 育江, 山城, 新, Yamazato, Katsunori, Gabe, Masaaki, Nakahodo, Masanori, Takara, Tetsumi, Ishihara, Masahide, Yoshida, Shigeru, Ogura, Nobuyuki, Todoriki, Hidemi, Miyahira, Katsuyuki, Kina, Ikue, Yamashiro, Shin メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15948

戦後沖縄とアメリカ

—異文化接触の総合的研究—

課題番号：14209011

平成14年度～平成16年度

科学研究費補助金基盤研究(A)(2)

科研成果報告書



琉球大学附属図書館



0020054010087

平成17年1月

研究代表者・山里勝己

琉球大学・法文学部・教授

はしがき

本報告集『戦後沖縄とアメリカ——異文化接触の総合的研究』は、表記のとおり、平成14年度より16年度までの3年間にわたる共同研究の成果をまとめた論文集である。この期間、科学研究費補助金「基盤研究(A)(2)」に採択され、本論文集に関わるすべての研究活動はこの研究費を活用して推進された。日本学術振興会によるご配慮に深い謝意を表明したい。

1945年以降の沖縄における異文化接触研究については、1995年の照屋善彦・山里勝己編『戦後沖縄とアメリカ—異文化接触の50年』(全563頁、沖縄タイムス社)をはじめとしていくつかの先行研究がある。それぞれ特色ある研究であるが、いずれも戦後沖縄で生じた異文化接触という現象の広がりや深みを十分に解明するには至らなかった。本報告集は、そのような研究成果を批判的に継承する中で、異文化接触研究という新たな領域の開拓を目的として推進されたものであった。

なぜ異文化接触か

1945年以降の沖縄でアメリカ研究を志した者であれば、それぞれの細分化された専門分野から越境しつつ、学際的にアメリカを理解しようとする衝動を抑えることはむづかしい。なぜなら、圧倒的なアメリカの存在と、その存在ゆえに生じた文化の混淆が日常的に目撃されてきたからだ。さらには、このような現象を目撃する者自身が混淆・融合する文化を生きざるをえない状態が動かしがたく存在した。例えば、戦後沖縄では、衣食住という文化の基本要素がアメリカ文化との混淆・合流を経て生成されてきた。また、音楽や演劇のような大衆文化、さらには「純」文学というハイカルチャーやそれを支える沖縄の思想にもアメリカはその巨大な影を落とし、異なる文化の接触から生ずる様々な人間模様の表象が、戦後の沖縄文化を独特の色合いに染め上げてきた。

単純に言えば、そこにアメリカがいる/あるから、という理由だけで研究が始まることもある。しかし、すこし考えてみれば、1945年以降の沖縄に住む多くの人間にとって、アメリカとの異文化接触の態様やメカニズムを知ることなしに、自らのアイデンティティの来歴を語ることはできないということが理解されるだろう。アメリカ文化との接触が始まってすでに60年、いまなお進行する沖縄における文化変容はより広範囲で深みのある分析や説明を要求する段階にきている。時間や資料も研究という営為十分に耐え得るだけの蓄積がある。なによりも、「アメリカ」は、否応なしに、沖縄に生きる個人の全存在に深く関わる事柄になってしまっている。

異文化接触とはなにか

「接触」という言葉は誤解を生みやすい。この言葉から、文化の諸要素が表層ですり合わされる状態を想像することもできる。あるいは、研究者がその細分化された領域に閉塞する中で「異文化接触」という言葉を用い、なおかつ「文化」に傾斜した分析をおこなうこと自体が、軍事基地の存在を隠蔽し、政治的な葛藤に満ちたこの現実を覆い隠す役目を果たしていると考えられることも可能であろう。皮相な研究のありようを想定すれば、それは

否定できないことである。

しかし、ここでいう「接触」とは、表層レベルのふれあいを指しているのではなく、異なる文化が遭遇し、混淆・衝突・融合する中で生起するさまざまなプロセスをその枠組みとして想定しているのである。世界のあらゆる場所で異なる文化が出会い、絡み合い、衝突し、極端な場合には暴力による支配・被支配の関係を構築してきた。帝国主義、植民地主義、あるいは奴隷制によって生じた文化の関係性を想起すればいい。言うまでもないことだが、今日のアジア、アフリカ、太平洋地域、そしてカリブ海文化圏に見られるような文化の混淆や混乱は、その多くは文化の強制された「出会い」から生み出されてきたものである。これは破壊的な行為をとまなう「出会い」でもあるが、同時に一方ではこれが創造的なプロセスをとまなうものであったことも否定できない。文化は果てしなく自己創造と変容をくりかえしていく。いつまでも「本質」を保つ文化が存在しないことはすでに常識である。たとえば、先述した『戦後沖縄とアメリカ——異文化接触の五〇年』は、1945年から1995年までの、半世紀に及ぶ沖縄における異文化接触のさまざまな様相を記述しようと試みたものであるが、収録された多くの論文が沖縄文化の「変容」に言及し、「接触」の結果としてもたらされた混淆、混乱、あるいは創造の複雑なプロセスを視認しようしつつ、その広がりや深みを具体的に分析し記述する。

帝国のまなざし

異なる文化が接触することは普遍的な現象である。ひとりの旅人は、見知らぬ土地を訪れ、そこで自らと異なる生き方をする集団と遭遇する。生き方の総体を「文化」と呼ぶとすれば、遭遇した瞬間からすでに相互に他者を分析・比較し、文化を融合しようとする衝動がわき起こる。極端な場合には暴力を用いて集団的にその社会や文化を支配し、歴史の書き換えが行われる。コロンブス以降の世界史に限ってみても、歴史の中で目撃されてきた多くの「出会い」が、このような破壊的な行為をとまなっていたはずである。そこにはメアリー・プラット(Mary Louise Pratt)が『帝国のまなざし—トラベル・ライティングと文化変容』(*Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, 1992)で指摘するように、巨大な政治力を有する者のまなざし、すなわち「帝国のまなざし」があり、「コンタクト・ゾーン」(contact zone)における支配・非支配の関係を基礎にした文化遭遇の多様なプロセスが展開されることになる。

琉球諸島という狭い地域においては、1945年から1972年までの27年間、社会の多様な領域において、ヨーロッパ系アメリカ人(ユーロアメリカン)を中心として形成された「アメリカ」文化との濃密な接触があり、そのような文化接触にとまなうさまざまな現象が生じた。これは、その濃密さにおいて、きわめて希有な事例であったと言えるだろう。このような接触に突き動かされて始動した文化の生成運動は、もはや停止することはなく、その運動エネルギーはいまでも琉球列島におけるさまざまな領域に浸透しつつ文化や社会を生成していくように見える。すなわち、アメリカとの接触にとまなう文化の変容あるいは生成は、アメリカ統治が終わった1972年に突然に終焉したのではなく、いまなお生起し続けているものなのである。仮にもはやそのような変容は顕在化していないのであれば、文化の浸透度あるいは変容の深度は深く、生成のありようも巧妙なものになっているのかも知れないのだ。沖縄で異文化接触を研究する意義は、このような文化変容にとま

なう多様で複雑なプロセスを記述し、説明することにある。そして、最終的には、このような濃密な接触のプロセスを観察する中において、普遍的な異文化接触のメカニズムを解明することにある。

プラットの「コンタクト・ゾーン」の概念は、主として17世紀以降のヨーロッパの帝国主義的な展開にともなう文化接触に基礎をおくものである。それでは、戦後沖縄における文化接触はどのように理解すればよいのであろうか。戦後沖縄において、「コンタクト・ゾーン」に見るような、あからさまな「帝国のまなざし」を有する文化の支配があったかと言えば、これについては、いまだ結論をみていないというのが妥当なところであろう。1945年以降の状況を説明するために、「パターナリズム」、「ネオコロニアリズム」、あるいは「ソフトコロニアリズム」などの用語が使われてきたが、アメリカ統治の27年間を明快に説明することはいまだなしていないことのように思われる。

つまり、戦後沖縄の27年間において、植地的文化遭遇があったか、と問われれば、ただちにそうだと答えることは簡単なことではない。あるいは、そのようなことが目撃されたこともあると答え、さまざまな事例を挙げることはできるだろう。冷戦を背景に、あるいは冷戦を口実として、基本的人権が制限されたり、米軍政府の強権により民主主義のプロセスが歪められたりしたこともある。沖縄という異文化遭遇の空間において、強制、あからさまな不平等、そして人権の抑圧が政治的に構造化されたかたちで存在したことは確かなことである。しかし、あらゆる領域において植地的支配・被支配の関係が浸透し、社会を呪縛していたと断言することも容易なことではない。これは、いまだに明確な結論が得られていない重要な論点であり、本論文集の主要な関心のひとつである。

文化変容 (Transculturation)

現代沖縄においては、いまなお文化の接触と葛藤(contact and conflict)、影響と合流(influence and confluence)、融合と混乱(fusion and confusion)が続いている。アメリカとの文化接触の研究において、支配・被支配の関係を想定し、強制される関係性だけに焦点を絞ることは、かえって複雑な文化接触のプロセスと人間のリアリスティックな生活の衝動を隠蔽する。「文化変容」は、民族学では、異文化との接触にともなう新たな総合的な文化の創造を意味する用語である。この用語は、「コンタクト・ゾーン」においては、被支配文化は支配的な文化のもたらす材料をどのように選択し受容するのか、あるいはなにを拒否するのかという文脈で使われる言葉である。プラットが指摘するように、植地地はメトロポリスから流入する文化を取捨選択しながら新たな文化を創造していった。同時に、ヨーロッパでは、植地地からもたらされた「果実」がその社会に浸透し、社会や文化や歴史だけでなく、ヨーロッパ人という主体自体が植地地という周縁の力やそこに生きる他者の存在によって形成されたのである。かくして、異なる文化が接触するさいには、支配・被支配だけの単純な二項対立の構造はあり得ない。日常生活のレベルでは、われわれは絶え間ない文化の混交と葛藤、融合と分離を体験し、それにとともなうアイデンティティの揺れを生きているのである。

それでは、戦後沖縄における「文化変容」とはいかなるものであったか？沖縄の人間は何を選択し、何を拒否したのか。その結果、どのような文化が新たに創造されたのか。もしそれが存在するとすれば、アメリカが沖縄から得た「果実」とは何であったか？それは

古典的な「コンタクト・ゾーン」に見られるような双方向のプロセスであり得たのか？あるいは、沖縄は、太平洋の果てるところに存する貧しい岩だらけの島であり、軍事目的だけのために使用され、The Rock と呼ばれるサンフランシスコ湾に浮かぶ（かつて連邦刑務所として使用された）アルカトラズ島のように、アメリカ人を閉じ込めるだけのものではなかったのか？（戦後初期、沖縄にやってきたアメリカ人たちが沖縄を The Rock と呼んだことは周知のことである）。

沖縄史上初の大学である琉球大学の誕生は、戦後沖縄社会と文化の変容に甚大な影響を与えたもののひとつであった。周知のように、その設立は米軍政府の手によるものであり、その誕生にいたる経緯と成長のプロセスは、異文化接触という現象をあざやかに説明する。琉球大学設立の経緯と、戦後 60 年における大学の沖縄社会に対する貢献を考えると、大学創立当時の為政者の政治的思惑を越えて、異文化接触の「果実」を享受したのはじつは沖縄側ではなかったのか、アメリカ側から流入する文化が全面的かつ深層レベルで沖縄社会に浸透しようとした瞬間があったが、それを巧妙に取捨選択しつつ自らの主体を確立していったのはじつは沖縄側ではなかったか、という見方も成立する。アメリカという他者を見つめる沖縄側のまなざしは鋭い逆照射を浴びたが、逆に言えば、沖縄人にとっては、他者としての自己を見つめ直す中で主体を確立しようとするプロセスがそこに成立したのである。この点で言えば、沖縄におけるクロスカルチュラルリティ(cross-culturality)―異文化接触により生起する文化の態様―の解明は、アメリカ文化が強力な推進力となって進行するグローバリゼーションと、そのようなプロセスにおいて展開される異文化接触の理解について、有益な示唆を与えるものとなるであろう。

文化接触は、双方向的なものである。「文化変容」という概念自体に、「被支配」文化の能動的な選択、すなわち「支配」的な文化との接触から文化を再創造し、総合化する（ハイブリッドなものにしていく）行為がすでに想定されている。この意味では、異文化接触の研究とは、じつはハイブリッドな文化エネルギーのダイナミズムを分析・理解することに他ならない。だから、最終的には、アメリカ側の変容も検討されなければならないはずである。アメリカは、沖縄において、沖縄を「文明化」という使命を自らに課した。これは具体的にはアメリカン・デモクラシーの浸透を意味した。支配的な政治勢力がこのような使命を自らに課すこと、あるいはそのような「使命」を支配と強制の口実とすることは、古典的な「コンタクト・ゾーン」でよく見られることであった。そしてその際に文明化の使命を帯びた勢力が犯した誤りは、それが接触し、「文明化」されることになっている社会の有する独自の力に盲目になるということであった。安定した統治（支配）のために、アメリカの民主主義は周縁文化＝沖縄文化とどのような遭遇の仕方を選択したか？沖縄文化に対してどのような性格付けがなされたか？沖縄側の反応・抵抗に対してアメリカの民主主義文化はどのような振る舞いを見せたか？これはきわめて興味深いことであり、そのような事例を見つけることはそうむづかしいことではないのかも知れない。しかし、このような双方向性が果たして研究に値するスケールで生起したのかどうか。これも本論集がその解答を模索した問題の一つであった。

異文化接触の生態学

戦後沖縄における異文化が遭遇するプロセスをどのように理解し、そのメカニズムをど

のように説明すればよいのであろうか。

ひとつの文化は固定された「純粋」なものではなく、接触し合い、融合をかさねて終わりのない自己生成を続ける。文化は人工的に構築された境界を自由奔放に越えていく。逆説的な言い方になるが、文化は抑圧することが不可能な「野性的」で「ワイルド」なエネルギーを内包し、そのような力でもって異なる文化と接触し、融合をかさねていく。それからさまざまな混乱と混淆を経たあとで花開き、実がはじけて文化の種が拡散するが、これは自己完結のない、果てしなく流動を続けるプロセスである。

このような文化観を、まずは「異文化接触の生態学」とでも言うておこう。このような視点から見ると、文化が生成される環境とは、無数の要素が相互依存するネットワークであり、排他的な境界が存在しない、開放されたスペースである。これは、文化間の差異のみに拘泥する見方ではなく、文化の混淆と融合に向かうエネルギー、あるいは異なる文化が相互依存する中から生まれくるエネルギーの可能性に注目する視座であり、混じりつけない純粋な文化が存在するという神話（文化的エッセンシャルイズム）を解体する考え方でもある。文化とは、さまざまな要素が相互依存しつつ融合をくり返す中で、総合化される/されてきた生活のシステムを指す言葉である。

戦後沖縄では、米軍基地を囲む金網、いわゆる「フェンス」は一種の国境であり、そこから「アメリカ」文化がすり抜けてやってきた。たとえて言えば、沖縄島という狭い島嶼の場所に、大陸的な文化環境、すなわちヨーロッパ、アジア、北米や南米、そしてアフリカに見られるような「国境」が存在しているのである。このような人為的に線引きされた「国境」というラインをやすやすとすり抜けて日常的に文化が接触する場が誕生したのであった。特に、衣食住は、開放された文化環境の中で混淆と融合をかさねた。沖縄とアメリカ双方の文化は、接触を重ね、深く絡まり合い、いまわれわれが目撃し体験するハイブリッドな戦後沖縄の文化が創造されてきたのである。

すでに戦後60年、アメリカ文化との接触はいまなお日常的に継続される現象であり、その全容を見極めることは容易なことではない。しかし、異文化を見つめ、そのような文化との接触のありようを研究することは継続されなければならない。ひとつには、なによりも異文化間の対話を続けるために、そして、究極的には、異文化に対する洞察を深め、他者に対するよりよい理解を模索するために――。

しかし、われわれは他者へと向う眼差しは、同時に鋭い逆照射を浴びるものであることをも理解しなければならない。すなわち、他者を見つめることは、同時に我々自身が見つめられ、そのまなざしの中でわれわれは自分が誰であるかを模索することを迫られることになる。戦後沖縄における異文化接触の中で、沖縄人が獲得したことのもっとも顕著なもののひとつは、アイデンティティに対する鋭い感覚であったと言ってもいいだろう。日々の生活の中で、他者と自己との対話を続けながら、異文化と向かい合うということは、沖縄の人間にとってはある種の国際性、開放性を獲得する機会となったとも言えるだろうし、同時にそれは固定された負のアイデンティティから自らを解放する契機をもたらしたものであった。これは抑圧される他者に対する共感とその葛藤に敏感な感覚をともなう自己認識であると言い換えてもよい。アメリカという他者を見つめ/見つめられた戦後沖縄の異文化接触体験は、トランスナショナルな次元を獲得することにつながったということもできるのである。

また、沖縄の人間は戦後体験として、戦争も、それに続く占領も、そして占領・統治から派生した移民も、激しい異文化接触であるということを知った。たとえば、『新沖縄県史』資料編に見るように、沖縄戦のさなかに日米双方がばらまいたプロパガンダ・ビラは比較文化論のための貴重な資料である。また、戦後の移民の歴史から、軍事占領・統治にともなう政策的な要素を排除することは不可能であろう。

アメリカによる沖縄占領と統治は、軍事的な強権による基本的人権の制限をとともなうものであった。かくして、沖縄の「祖国」復帰運動は、日本国憲法の保障する諸権利の獲得をめざす公民権運動の側面を有するものとなった。アメリカは、戦後において、自国におけるマイノリティの公民権運動と沖縄における復帰運動に見るように、本国とその軍事統治下にある沖縄で同様のベクトルを有する激しい政治運動を抱えこむことになったのである。沖縄の「祖国」復帰運動は、「祖国」をもとめたが故にそのナショナリスティックな性格が強調され、批判される傾向にあったが、異文化接触という視点から見れば、それは現代の「コンタクト・ゾーン」における抑圧に対して基本的人権を要求していくという、トランスナショナルな性格を強く帯びた運動であったと考えることもできる。それは 1950年代から 60年代にかけての、かつての帝国の支配から独立を果たそうとする国際的な脱植民地化運動と、強く共振するものであったことを忘れてはならない。

戦後沖縄における異文化接触や「祖国」復帰運動は、じつは 19 世紀以降の、アメリカ合衆国を中心として語られる「自由」と「民主主義」を主題とする、世界規模の大きな「帝国」の物語の一節に過ぎないのかもしれない。極端に言えば、われわれはこのような舞台の「環太平洋」という一幕におけるごくマイナーな通行人の役割を演じているだけなのかもしれない。しかし、このよう舞台では、つねにマイナーな登場人物たちが支配や、強制や、不平等や、隷属に抵抗する中でプロットが進行したこともまた忘れてはならないだろう。それゆえ、このような研究は、同様の体験をした地域や諸国との比較研究というより大きなスケールで展開されることで深化されることになる。アジア・太平洋地域で言えば、フィリピン、ハワイ、グアムが想起され、カリブ海域ではプエルトリコがアメリカとの文化接触で大きな文化変容を体験した社会として挙げられる。研究が普遍的な洞察を獲得するためには、このような広がりの中で展開される知見に基礎をおくものでなければならない。

しかし、まずは自らの足下から始めるしかない。混乱と葛藤をくぐり抜けてきたあとの 21 世紀初頭の視点で言えば、戦後沖縄の体験は文化を未来に開く体験であったと言明することは、かならずしも誤りではない。つまり、ユーロアメリカ文化を核とする「アメリカ」文化という異文化との接触とそれを契機とする「文化変容」は、一面では戦後を生きてきた沖縄人にある種の希望をもたらしたものでもあった。例えば、高等教育の創造、閉じられた島嶼性からの脱却、風土病の根絶、伝統芸能の復活とその新たな全国的・国際的な受容、1945 年以前の軍国主義・全体主義思想からの解放と批判的な民主主義思想の獲得、沖縄の内と外における差別や不寛容の克服、アイデンティティの揺れとその結果としての負のアイデンティティからの解放などは、異文化遭遇という衝撃と密接に関連するものであると見ていいだろう。

「過去」とは過ぎ去った現象のみを意味するのではない。われわれはいまなお「過去」に規定され、いまこの瞬間も過去の歴史を生きている。先述したように、1945 年以降の沖

縄で生じた異文化接触のプロセスは 1972 年にその文化生成のエネルギーを喪失したわけではない。それどころか、過去と現在の（生態学のメタファーで言えば）相互浸透するエネルギーの中からわれわれの生き方が立ち上がってくるのである。換言すれば、沖縄におけるクロスカルチュラルリティ（異文化接触により生じた文化の態様）は、さまざまにそのすがたを変えながら、いまなおわれわれの想像力を支配し、われわれの言葉を規定する力を有しているということなのだ。そのメカニズムはいかなるものであるか。それはひそかにわれわれの想像力に埋め込まれ、われわれの言説に浸透し、われわれの現在の諸関係を衝き動かす。本報告集は、そのような文化のすがたをつくり出すメカニズムを解明し、そのメカニズムによって顕在化した諸相を読み解こうするものである。

本報告書は三部構成となっている。I 部は人文社会科学系の研究報告、II 部には自然科学系の報告をまとめ、最後に III 部として、国際シンポジウムにおいて発表されたアメリカ側の報告をまとめている。本報告書が、戦後沖縄における異文化接触を理解するための一助となるものであることを期待したい。

*

本研究を推進するにあたって、米須興文氏、クレイグ・ウィルコックス氏、亀井俊介氏、松尾弑之氏、平石貴樹氏、大津留（北川）智恵子氏、巽孝之氏に研究会にご参加いただき、ご講演をしていただく中で、貴重な助言や研究を深化するための深い知見を示していただいた。

また、平成 15 年度にはカリフォルニア大学デイヴィス校で“Symposium: Cross-Cultural Contact between the U. S. and Okinawa”を開催し、アメリカ側の研究者と合同で研究を深化することができた。本報告書には、シンポジウムでの口頭発表に基づいて執筆されたアメリカ側研究者の論考も収録した。カリフォルニア大学デイヴィス校とコーディネーターをつとめていただいたダレル・Y・ハマモト教授には記して謝意を表明したい。

沖縄公文書館の仲本和彦氏には、米国公文書館での資料収集の際に、丁寧なご指導をいただいた。

平成 15 年と 16 年には、琉球大学アメリカ研究会大会において、研究代表者及び分担者による個人発表とシンポジウムを開催し、本研究の成果を公開することができた。

なお、国内における研究会は計 17 回を数え、最終年度の平成 16 年前半は毎週月曜日に研究会を開催した。

このような共同研究は、琉球大学研究協力課及び法文学部総務係、そして諸機関の強力な支援がなければその推進は不可能なことであった。3 年間にわたってご指導・ご協力いただいたすべての方々にお礼を申し上げたい。

研究代表者 山里勝己
琉球大学法文学部・教授

研究課題

戦後沖縄とアメリカ——異文化接触の総合的研究

1945年以降の沖縄の歴史は異文化接触の歴史であり、それは戦後日本でも極めて特異な歴史であった。本研究は、このような戦後沖縄におけるアメリカ文化との異文化接触により生じた現象を、国際政治、憲法、沖縄文学、アメリカ文学・文化、言語政策、コミュニケーション論、食品学、農業経済、建築学、公衆衛生の各領域において分析し、最終的には学際的な総合化をとおして異文化接触の全体像を理解することを目的として進めた。さらに、このような研究をとおして、異文化接触のメカニズムを解明し、普遍的なモデルの構築を試みつつ21世紀の国際社会における相互理解に寄与することを最終的な目標として研究を展開した。

このような目的、目標を達成するために、平成14年から16年において、以下のような研究活動を推進した。

1) 米国公文書館をはじめとして、公文書館における文書の収集、戦後沖縄に直接に関わった沖縄及び日米の関係者に対するアンケート・聞き取り調査等を含めて、新しい知見を得るべく、実証的かつ総合的な研究を遂行した。

2) 研究分担者間の相互連携及び異文化接触に関する理論的深化をはかるために、研究組織内で計17回の研究会を開催し、同時に国内の関連分野から講師を招聘しつつ研究を進めた。

3) 平成15年度は、カリフォルニア大学デイヴィス校において、アメリカ側の研究者とともに国際シンポジウム(“Symposium: Cross-Cultural Contact between the U.S. and Okinawa”)を開催し、国際的な連携を図りつつ研究を推進した。

4) 研究期間中に個々の成果を発表してきたが、特に平成15年と平成16年は、琉球大学アメリカ研究会大会において個人発表を行うと同時にシンポジウムを開催し、研究成果を公開した。

5) 平成14学年度から平成16学年度まで、研究代表者及び研究分担者が高学年次用総合科目「現代アメリカ論」を担当することにより、本研究による成果を大学教育に還元することができた。

6) 以上の活動を基礎に、研究分担者がそれぞれの課題について研究報告をまとめた。

研究代表者：山里勝己

研究組織

研究代表者： 山里 勝己・琉球大学・法文学部・教授（米文学）・80101450
研究分担者： 我部 政明・琉球大学・法文学部・教授（国際関係学）・60175297
仲程 昌徳・琉球大学・法文学部・教授（沖縄文学）・50044863
高良 鉄美・琉球大学・法文学部・教授（法学）・40175435
石原 昌英・琉球大学・法文学部・教授（言語学）・70244283
吉田 茂・琉球大学・農学部・教授（農林経営学）・20045107
小倉 暢之・琉球大学・工学部・助教授（建築学）・30117569
等々力 英美・琉球大学・医学部・助教授（保健医学）・60175479
宮平 勝行・琉球大学・法文学部・助教授（コミュニケーション学）・10264467
喜納 育江・琉球大学・法文学部・助教授（米文学）・20284945
山城 新・琉球大学・法文学部・講師（米文学）・80363654
海外共同研究者： Darrell Y. Hamamoto・カリフォルニア大学デイビス校・教授・アジア系アメリカ文化研究
研究協力者： 金城須美子・琉球大学・教育学部・名誉教授（栄養学）

交付決定額

（金額単位：千円）

平成14年度	10,750
平成15年度	11,600
平成16年度	8,700
総計	31,050

研究発表

（1）

口頭発表： 琉大・カリフォルニア大合同シンポジウム【Ryudai-UC Joint Symposium: Cross-Cultural Contact between the U.S. and Okinawa】
日時： 2003年11月7日～8日
場所： アメリカ合衆国カリフォルニア大学デイビス校
内容： 次項プログラム参照
発表者： 研究代表者 山里勝己
研究分担者 高良鉄美、石原昌英、等々力英美、小倉暢之、宮平勝行、喜納育江、山城新
アメリカ合衆国研究者： Darrell HAMAMOTO, Ben KOBASHIGAWA, Edith KANESHIRO, Wesley UEUNTEN, Kozy AMEMIYA, Yoko FUKUMURA
コーディネーター： 山里勝己、Darrell HAMAMOTO

プログラム

琉大・カリフォルニア大合同シンポジウム

—戦後沖縄とアメリカの異文化接触—

平成15年11月7～8日

ARG, Alumni Center, カリフォルニア大学デイビス校

平成15年11月7日(金)

司会: 山里 勝己

10:00 – 10:30

Tetsumi TAKARA / 高良 鉄美

Constitutional Law, Univ. of the Ryukyus

“Using the Constitutional Ideas in the Time of the Absence of a Constitution.”

10:35– 11:05

Wesley UENTEN

Comparative Ethnic Studies, UC Berkeley

"The American Occupation of Okinawa and Okinawan Identity Formation in Hawai'i"

11:10—11:40

Masahide ISHIHARA / 石原 昌英

Linguistics/Sociolinguistics, Univ. of the Ryukyus

“USCAR's Language Policy and English Education in Okinawa.”

11:45—12:15

Darrell Y. HAMAMOTO

Asian American Studies, UC Davis

"US Imperialism in Asian American Studies Theory and Method"

12:15—13:15

Lunch

13:15—13:45

Hidemi TODORIKI / 等々力 英美

Public Health, Univ. of the Ryukyus

“Nutrition and Longevity Crisis in Post-war Okinawa”

13:50—14:20

Katsuyuki MIYAHIRA / 宮平 勝行

Intercultural Communication, Univ. of the Ryukyus

“Metaphors and Metonymies in the USCAR Public Discourse.”

14:25—14:55

Yoko FUKUMURA

History, UC Santa Cruz

"U.S.-Okinawa Relations through Okinawan Women's Activism: Local Struggles and Transnational Movements Against U.S. Militarism"

15:00—15:30

Coffee Break

15:35—16:05

Panel Discussion

Questions & Answers with the Audience

平成15年11月8日(土)

司会: **Dr. Darrell Hamamoto**

10:00 – 10:30

Shin YAMASHIRO / 山城 新

Environmental Literature, Univ. of the Ryukyus

“What's Okinawan about the Okinawan Environmental Movements?: Analyzing Cross-Cultural Aspects in the Social and Environmental Justice Movements in Post-War Okinawa.”

10:35– 11:05

Edith KANESHIRO

	History, Pitzer College “For Compassionate Reasons’: Okinawan Repatriations during American Occupation of Japan”
11:10—11:40	Nobuyuki OGURA / 小倉 暢之 Architectural Planning and History, Univ. of the Ryukyus “Rapid Diffusion of Modern Buildings and the Planning Method in Postwar Okinawa”
11:45—12:15	Ikue KINA / 喜納 育江 American Literature, Univ. of the Ryukyus “Sisterhood in the Postwar U.S.-Okinawa Cross-Cultural Contact”
12:15—13:15	Lunch
13:15—13:45	Kozy AMEMIYA Asian American Studies, UC Los Angeles “Okinawan Bolivians in the Postwar Era”
13:50—14:20	Katsunori YAMAZATO / 山里 勝己 American Literature, Univ. of the Ryukyus “The Birth of a University: The MSU Mission and the University of the Ryukyus.”
14:25—14:55	Ben KOBASHIGAWA Asian American Studies, San Francisco State University “Some Notes on the Transnational Impact of Okinawan Emigrants on Prewar and Postwar Okinawa.”
15:00—15:30	Coffee Break
15:35—16:05	Panel Discussion Questions & Answers with the Audience

(2)

口頭発表:	琉球大学アメリカ研究大会【Annual Meeting of the American Studies Society of the University of the Ryukyus】
日時:	2003年11月29日
場所:	琉球大学法文学部新棟114号室
内容:	次項プログラム参照
発表者:	研究分担者 石原昌英、等々力英美
司会:	吉田茂
シンポジウム	
パネリスト	研究分担者 仲程昌徳、我部政明 研究協力者 金城須美子
内容	次項プログラム参照

プログラム (一部抜粋)
第25回 琉球大学アメリカ研究大会プログラム
～ペリー来航150年～
日時: 2003年11月29日(土) 10:00～17:00

	会場：琉球大学法文学部新講義棟 114号教室
11:00 - 11:30	石原 昌英 「米国統治下の沖縄における英語の普及と活字メディア」
11:30 - 12:00	等々力英美 「沖縄における米国の戦災復興政策は現在に活かせるか?—保健医療における評価と利用可能性—」
15:50 - 17:15	シンポジウム ～ペリー来航150年～ 司会兼パネリスト：仲程昌徳 パネリスト： 照屋善彦 我部政明 金城須美子

(3)

口頭発表：	琉球大学アメリカ研究大会【Annual Conference of the American Studies Society of the University of the Ryukyus】
日時：	2004年11月27日
場所：	琉球大学法文学部新棟114号室
内容：	次項プログラム参照
発表者：	研究分担者 宮平勝行、喜納育江、山城新
司会：	吉田茂
特別講演：	Darrell HAMAMOTO “Imperial Visions: Nikkei Impressions of Okinawa, Japan, and the U.S.”
シンポジウム	
司会兼パネリスト	研究代表者 山里勝己
パネリスト	研究分担者 我部政明、高良鉄美、等々力英美
内容	次項プログラム参照

	プログラム（一部抜粋）
	第26回 琉球大学アメリカ研究大会プログラム ～ひび割れた鏡：アメリカの見た沖縄・沖縄の見たアメリカ～
	日時：2004年11月27日(土) 10:00～17:00
	会場：琉球大学法文学部新講義棟114号教室
10:30 - 11:00	宮平 勝行 「平和のメタファー—戦後沖縄における統治と被統治のレトリック」
11:30 - 12:00	山城 新 「沖縄環境思想史：軍政との関わりにおいて」
12:00 - 12:30	喜納 育江 「戦後沖縄とアメリカの婦人会活動に見る女性の公的領域とそのコンテキスト」
12:30 - 13:30	特別講演 司会： 山里勝己 講演者： Dr. Darrell Hamamoto, カリフォルニア大学・デイビス校教授 題目： “Imperial Visions: Nikkei Impressions of Okinawa, Japan,

and the U.S.”
 通訳： 山城 新（琉球大学法文学部講師）
 15:50 - 17:15 シンポジウム ～ひび割れた鏡：アメリカの見た沖縄・沖縄の見たアメリカ～
 司会兼パネリスト 山里勝己
 パネリスト 研究分担者
 我部政明
 高良鉄美
 等々力英美

出版物

..... (書籍)

- 著者・編者： 山里勝己（共著）
 書名： 『沖縄を深く知る事典』
 出版社名： 日外アソシエーツ
 出版年： 2003
- 著者・編者： YAMAZATO, Katsunori（共著）
 書名： *The First Decade of Ecocriticism: Charting the Edges*
 出版社名： U of Georgia Press
 出版年： 2003
- 著者・編者： 山里勝己（共編著）
 書名： 『文学と自然のダイアローグー都市、田園、野生』
 出版社名： 彩流社
 出版年： 2004
- 著者・編者： 山里 勝己（共著）
 書名： 『越境するトポス』
 出版社名： 彩流社
 出版年： 2004
- 著者・編者： 山里 勝己（監修・解説）
 書名： *Popular Western Literature, Part I: The 19th Century* 全10巻
 出版社名： アティーナ・プレス
 出版年： 2004
- 著者・編者： 石原 昌英・比屋根 照夫他（共著）
 書名： 『日米における同化政策と20世紀沖縄』（平成13・14・15年度
 科学研究補助金（基盤研究A）研究成果報告書）（総ページ数：268ペ

ージ)
出版社名： 琉球大学法文学部
出版年： 2004.3

著者・編者： 等々力 英美（共著）
書名・雑誌名： 『トレーサビリティ IC タグの新技术で食の安全性：その徹底検証』
出版社名： 東京教育情報センター
出版年： 2004.10

..... (論文)

著者・編者： 我部 政明
論文名： 返還から30年、講和から50年の沖縄
書名・雑誌名： 『世界週報』 2002年5月21日号, 83・19
ページ；出版年： 6-9; 2002
出版年

著者・編者： 高良 鉄美
論文名： 琉球大学法科大学院サマープログラム・イン・ハワイ The University
of the Ryukyus School of Law Summer Program in Hawaii
書名・雑誌名： 『琉大法学』73号
ページ；出版年： 1-27; 2005.3

著者・編者： 高良 鉄美
論文名： 代理署名訴訟
書名・雑誌名： 『沖縄を平和学する』 仲地博・石原昌家編
出版社名： 法律文化社
ページ；出版年： 1-27; 2005.4

著者・編者： TODORIKI, Hidemi
論文名： “The Nutrition Transition In Post-War Okinawa: Changes In Body
Weight And Fat Intake.”
書名・雑誌名： Final Programme & book of abstracts of the XVI IEA world congress
of epidemiology Montreal: International Epidemiological
Association
ページ；出版年 0C21.1; 2002

著者・編者： 等々力 英美
論文名： 「戦後沖縄における栄養転換:脂質摂取変化と体重変動」

- 書名・雑誌名： 『民族衛生』, 68号
 ページ; 出版年 56-57; 2002
- 著者・編者： 等々力 英美
 論文名： 戦後沖縄における栄養転換:政策決定への評価と利用可能性
 書名・雑誌名： *Journal of Epidemiology*, 12.
 ページ; 出版年 106; 2002
- 著者・編者： 仲程 昌徳
 論文名： 「『挿話』を読みかえるー「二世」小論」
 書名・雑誌名： 『アジア遊学』56号
 ページ; 出版年 2002
- 著者・編者： 仲程 昌徳
 論文名： 「『ひめゆりの塔』の記を読む」
 書名・雑誌名： 仲宗根政善著『ひめゆりと生きて：仲宗根政善日記』（琉球新報社）
 出版年： 2002
- 著者・編者： 仲程 昌徳
 論文名： 「小説『琉球処分』」
 書名・雑誌名： 『大城立裕全集 1』1巻
 出版年： 2002
- 著者・編者： 我部 政明
 論文名： 「米軍基地と沖縄—1945年から今日まで」
 書名・雑誌名： 長谷川雄一編『日本外交のアイデンティティ』（南窓社）
 ページ; 出版年 110頁—147頁
 出版年： 2003.12
- 著者・編者： 我部 政明
 論文名： 「9・11後の日米関係—安全保障の視点から」
 書名・雑誌名： 林康次編『アメリカ帝国と多文化社会のあいだ—国際比較文化フォーラム21世紀』（開文社出版）
 ページ; 出版年 231頁—249頁; 2003
- 著者・編者： 仲程 昌徳
 論文名： 「ひめゆり」の読まれ方—映画『ひめゆりの塔』四本をめぐって」
 書名・雑誌名： 琉大法文学部紀要 日本東洋文化論集9号
 出版年： 2003

- 著者・編者： 喜納 育江
論文名： 「ネイティブなるもの：魂の交わりを求めて」
書名・雑誌名： 今福龍太編 『境域の文学』 岩波書店
ページ；出版年 201-236；2003
- 著者・編者： 小倉 暢之
論文名： 「戦後の沖縄における沖縄住宅公社による米軍住宅建設プロセスと計画管理技術に関する研究」
書名・雑誌名： 『日本建築学会計画系論文集』566号
ページ；出版年 105-111；2003
- 著者・編者： 小倉 暢之
論文名： 戦後沖縄のコンクリート建築普及における設計技術の特質 その2
設計の背景と平面計画
書名・雑誌名： 日本建築学会九州支部研究報告、42号(3)
ページ；出版年 621-624；2003
- 著者・編者： 金城芳秀、等々力英美、高倉実
論文名： 「沖縄の若年層における栄養・発育の現状と課題」
書名・雑誌名： 木村美恵子・新保慎一郎編『若者の生活、食・栄養と健康』（日本学会事務センター）
出版年： 2004.4
- 著者・編者： 等々力 英美
論文名： 「情報化社会におけるコミュニケーション —栄養学領域の関連項目—」
書名・雑誌名： 高島豊、櫻井裕編『社会・環境と健康』（医歯薬出版）
出版年： 2004.12
- 著者・編者： TODORIKI, Hidemi., WILLCOX, Craig. & WILLCOX, Bradley.
論文名： The Effects of Post-War Dietary Change on Longevity and Health in Okinawa.
書名・雑誌名： *The Okinawan Journal of American Studies, 1*
ページ；出版年 52-61；2004
- 著者・編者： 小倉 暢之
論文名： 「戦後沖縄におけるコンクリートブロック品質保全法の成立過程」
書名・雑誌名： 『日本建築学会九州支部研究報告』43号
ページ；出版年 593-596；2004

- 著者・編者： YAMAZATO, Katsunori
論文名： “The Birth of a University: The Background and Some Problems Concerning the Establishment of the University of the Ryukyus.
書名・雑誌名： *The Okinawan Journal of American Studies, 1*
ページ；出版年 10-18; 2004
- 著者・編者： OGURA, Nobuyuki
論文名： “Rapid Spread of Modern Buildings and the Simplification of Planning Method in Postwar Okinawa.”
書名・雑誌名： *The Okinawan Journal of American Studies, 1*
ページ；出版年 45-51; 2004
- 著者・編者： MIYAHIRA, Katsuyuki
論文名： “From a Community Church to a “Commuter Church” : Speech Codes and Ethnic Identity among Japanese Americans.”
書名・雑誌名： *The Okinawan Journal of American Studies, 1*
ページ；出版年 28-37; 2004
- 著者・編者： OGURA, Nobuyuki
論文名： “Concrete Public Buildings and Their Planning Methods in Postwar Okinawa”
書名・雑誌名： *Proceedings of 5th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia*
ページ；出版年 284-287
出版年： 2004.6
- 著者・編者： 宮平 勝行
論文名： 「スピーチ・コード理論とアメリカ社会の多様性」
書名・雑誌名： 『アジア太平洋地域におけるアメリカ研究の現状と課題に関する総合的研究』（アメリカ研究センター）
ページ；出版年 49-60; 2004
- 著者・編者： ISHIRAHRA, Masahide
論文名： “USCAR’s Language Policy and English Education in Okinawa: Featuring Commissioner Caraway’s Policies.”
書名・雑誌名： *Okinawan Journal of American Studies, 1*
ページ；出版年 19-27; 2004
- 著者・編者： 吉田 茂

- 論文名： 「戦後初期の沖縄畜産の回復過程と布哇連合沖縄救済会」第 51 号
 書名・雑誌名： 『琉球大学農学部学術報告』
 ページ；出版年 96～100；2004
- 著者・編者： 仲程 昌徳
 論文名： 台湾・南洋群島・比律賓－「大東亜戦争」期の著作物をめぐって
 書名・雑誌名： 『沖縄文化研究』2号
 出版年： 2004
- 著者・編者： 仲程 昌徳
 論文名： 「歴史の決算－大城文学と琉球・沖縄の文学」
 書名・雑誌名： 黒古一夫編『大城立裕文学アルバム』（勉誠出版）
 出版年： 2004.3
- 著者・編者： 上原桃子，小倉暢之
 論文名： 琉球政府時代の公共建築における地域性の表現に関する研究
 書名・雑誌名： 日本建築学会九州支部研究報告，第 44 号
 出版年： 2005.3
- 著者・編者： 呉屋さゆり，小倉暢之
 論文名： 沖縄県におけるコンクリート住宅の展開に関する研究
 書名・雑誌名： 日本建築学会九州支部研究報告，第 44 号
 出版年： 2005.3
- 著者・編者： 等々力 英美
 論文名： 「食物摂取頻度調査法と妥当性と再現性」
 書名・雑誌名： 田中平三、伊達ちぐさ、佐々木敏編『公衆栄養』（南江堂）
 出版年： 2005（印刷中）
- 著者・編者： 等々力英美
 論文名： 「食事摂取量の測定法」
 書名・雑誌名： 赤羽正之編『公衆栄養』（化学同人）
 出版年： 2005（印刷中）
- 著者・編者： MIYAHIRA, Katsuyuki
 論文名： “Peace Metaphor: A rhetoric of occupation in postwar Okinawa.”
 書名・雑誌名： *Okinawan Journal of American Studies 2*
 出版年： 2005（印刷中）
- 著者・編者： YAMASHIRO, Shin

論文名： “What’s Okinawan about Okinawan Environmental Problems?: An Outline of Cross-Cultural Environmental Experiences in Okinawa in the 1970s”
書名・雑誌名： *Okinawan Journal of American Studies* 2
出版年： 2005 (印刷中)

研究経緯

平成 14 年度

第 1 回研究会

日時： 平成 14 年 8 月 31 日 (土) ～9 月 1 日 (日)
場所： 沖縄県勝連町マリリゾート浜比嘉 会議室
講演者(1)： 琉球大学名誉教授 米須興文
内容： 「異文化接触と文学」
講演者(2)： 沖縄県立看護大学 講師 クレイグ・ウィルコックス (Dr. Craig Willcox)
内容： 「異文化接触と沖縄の長寿に関する研究」
参加者： 研究代表者 山里勝己
研究分担者 吉田茂、等々力英美、小倉暢之、我部政明、高良鉄美、石原昌英、宮平勝行、仲程昌徳、喜納育江
研究協力者 金城須美子

第 2 回研究会

日時： 平成 15 年 3 月 22 日
場所： 琉球大学アメリカ研究センター
講演者： 岐阜女子大学文学部 教授 亀井俊介
内容： 「日本におけるアメリカ学」
参加者： 研究代表者 山里勝己
研究分担者 高良鉄美、仲程昌徳、石原昌英、等々力英美、小倉暢之、宮平勝行、喜納育江
研究協力者 金城須美子

平成 15 年度

第 3 回研究会

日時： 平成 15 年 11 月 26 日
場所： 琉球大学アメリカ研究センター
講演者： 東京大学 大学院人文社会系研究科教授 平石貴樹
内容： 「フォークナーと異文化接触」
参加者： 研究代表者 山里勝己
研究分担者 仲程昌徳、我部政明、石原昌英、等々力英美、小倉暢之、宮平勝行、喜納育江、山城新
研究協力者 金城須美子

第4回研究会

日時： 平成15年12月4日

場所： 琉球大学アメリカ研究センター

講演者： 上智大学外国語学部教授 松尾式之^{まつしゆき}

内容： 「上智大学アメリカカナダ研究所における日系研究と戦後占領研究」

参加者： 研究代表者 山里勝己

研究分担者 高良鉄美、仲程昌徳、我部政明、石原昌英、等々力英美、
小倉暢之、宮平勝行、喜納育江、山城新

平成16年度

第5回研究会

日時： 平成16年8月7日

場所： 琉球大学アメリカ研究センター

講演者： 関西大学教授 大津留（北川）智恵子

内容： 「アメリカのナショナリズムと市民像」

参加者： 研究代表者 山里勝己

研究分担者 我部政明、石原昌英、宮平勝行、喜納育江、山城新

第6回研究会

日時： 平成17年1月21日

場所： 法文学部文系総合研究棟多目的室

講演者： 慶應義塾大学文学部教授 巽孝之

内容： 「『白鯨』アメリカン・スタディーズ——環太平洋想像力の変容」

参加者： 研究代表者 山里勝己

研究分担者 我部政明、石原昌英、宮平勝行、喜納育江、山城新、他約
50人

研究分担者を中心としたワークショップ・シリーズ（於： 琉球大学アメリカ研究センター）

第1回ワークショップ

日時： 平成16年5月10日

発表者： 琉球大学工学部 助教授 小倉暢之

内容： 「戦後沖縄のコンクリート建築普及における設計技術の適応」

第2回ワークショップ

日時： 平成16年5月17日

発表者： 琉球大学法文学部 教授 仲程昌徳

内容： 「ハワイイの琉歌」

第3回ワークショップ

日時： 平成 16 年 5 月 24 日
発表者： 琉球大学法文学部 教授 山里勝己
内容： 「大学の誕生（2）——琉球大学とミシガン・ミッション」

第4回ワークショップ

日時： 平成 16 年 5 月 31 日
発表者： 琉球大学農学部 名誉教授 吉田茂
内容： 「戦後初期の沖縄畜産の回復過程と布哇在沖縄県人会～豚と山羊～」
沖縄の戦後復興のために沖縄へ豚並びに山羊の寄贈に取り組んだ布哇在沖縄県人会の活動を総合的にまとめた。

第5回ワークショップ

日時： 平成 16 年 6 月 7 日
発表者： 琉球大学法文学部 助教授 宮平勝行
内容： “Strict Father” Morality at Work: A Metaphor Analysis of US Discourse on Okinawa.
アメリカの道德観を二分すると考えられている「厳しい父親」的道德観と「慈悲深い親」的道德観について概説し、その視点から戦後沖縄の統治を考察した。

第6回ワークショップ

日時： 平成 16 年 6 月 14 日
発表者： 琉球大学法文学部 教授 石原昌英
内容： 「戦後沖縄の英語教育とMSUミッション英語顧問」
ミシガン州立大学教授団に1955年から参加した英語顧問がもたらした琉球大学における英語教育の改革と民政府の英語教育政策への関与について述べた。

第7回ワークショップ

日時： 平成 16 年 6 月 21 日
発表者： 琉球大学法文学部 講師 山城新
内容： 「沖縄環境思想史へのアプローチ」

第8回ワークショップ

日時： 平成 16 年 7 月 5 日
発表者： 琉球大学医学部 助教授 等々力英美
内容： 1) Evaluation to public health policy decision of war devastation revival-- Availability of US experience in postwar Okinawa?
2) Hawaiiにおける日系（沖縄系）移民のWesternizationがおよぼす長寿性と短寿性について(Pacific Health Research Instituteとの共同研究)

3) 沖縄・Hawaii・ポリネシア（ミクロネシア）の島嶼地域における栄養
転換と主食転換が健康におよぼす影響

第9回ワークショップ

日時： 平成16年7月12日

発表者： 琉球大学法文学部 助教授 喜納育江

内容： 「戦後沖縄とアメリカの異文化接触：ジェンダーの視点から」

第10回ワークショップ

日時： 平成16年7月26日

発表者： 琉球大学教育学部 名誉教授 金城須美子

内容： 「異文化接触と沖縄の食文化」

第11回ワークショップ

日時： 平成16年8月4日

発表者： 琉球大学法文学部 教授 我部政明

内容： 「戦後沖縄とアメリカー異文化接触は何をもたらすのか」

【参考資料】

John Hopkins University 発行の *The Ryukyuanist* (2003 年第 61 号) に本科研グループ主催の国際シンポジウムが紹介された。以下当該ページを参考資料として添付する。

Communication

Ryudai-UCD Joint Symposium Cross-Cultural Contact between the U.S. and Okinawa

The symposium was held on the campus of the University of California, Davis on November 7 and 8, 2003. The purpose of the symposium was to examine the relationship between Okinawa and the United States in the postwar era. It was part of the study of the 150-year relationship between the U.S. and Japan, funded by the Ministry of Education of the Japanese government. The international symposium is the first phase of a three-year project that includes sending Okinawan scholars to the U.S. and vice versa. The symposium was chaired by Professor Katsunori Yamazato of Ryudai (University of the Ryukyus) and Professor Darrell Hamamoto (University of California, Davis).

Papers from Ryudai:

Masahide Ishihara. *Using the Constitutional Ideas in the Time of the Absence of a Constitution.*

Masahide Ishihara. *USCAR's Language Policy and English Education in Okinawa.*

Hidemi Todoriki. *Nutrition and Longevity: Crisis in Postwar Okinawa.*

Katsuyuki Miyahira. *Metaphors and Metonymies in the USCAR Public Discourse.*

Shin Yamashiro. *What's Okinawan about the Okinawan Environmental Movements?*

Nobuyuki Ogura. *Rapid Diffusion of Modern Buildings and the Planning Method in Postwar Okinawa.*

Ikue Kina. *Women in Postwar Okinawa 1945-60: Cross-Cultural Sisterhood and/or a Form of Imperialism?*

Katsunori Yamazato. *The birth of a University: The MSU Mission and the University of the Ryukyus.*

Papers from the United States:

Wesley Ueunten, *The American Occupation of Okinawa and Okinawan Identity Formation in Hawaii.*

Darrell Hamamoto, *US Imperialism in Asian American Studies: Theory and Method.*

Yoko Fukumura, *U.S.-Okinawa Relations through Okinawan Women's Activism: Local Struggles and Transnational Movements Against U.S. Militarism.*

Edith Kaneshiro, *For compassionate Reasons: Okinawan Repatriations during American Occupation of Japan.*

Kozy Amemiya, *Success by Default: Fifty Years of Postwar Okinawan Immigration into Bolivia.*

Ben Kobashigawa, *Some Notes on the Transnational Impact of Okinawan Emigrants on Prewar and Postwar Okinawa.*

From these papers that covered a wide range of topics and fields of research emerged an unmistakable theme that ran through all the presentations. That is, how deeply and pervasively the U.S. occupation permeated into every aspect of Okinawans' lives, from law to education, architecture, diet, etc., and completely changed the ways in which Okinawans lived. It also had a strong impact on the lives of overseas Okinawans. Furthermore, the U.S. occupation has left legacies behind, which continue to influence Okinawans' lives. Discussions after each paper presentation were lively, and the participants and audience alike exchanged ideas vigorously. The papers will be compiled into a book to be published first in Japanese and then in English.

Kozy Amemiya

The Ryukyuanist is edited by Koji Taira and Frank Jiro Shima at The Reischauer Center for East Asian Studies, School of Advanced International Studies at The Johns Hopkins University: 1619 Massachusetts Avenue, NW, Washington, D.C. 20036. Contact: Koji Taira at <k-taira@uiuc.edu> (or Tel: 217-333-1482 for message only) and Frank Shima at <fjshima@jhu.edu> (or Tel: 202-663-5815). Hard copy subscription: U.S. \$10.00 per year. Also available online free at <www.iaros.org>, University of Bonn.

目次

I

異文化接触のリアリティー——ある人生の軌跡から	1
	我部 政明
成文憲法不存在の際の憲法理念の活用: Using Constitutional Ideas in the Time of the Absence of a Constitution	15
	高良 鉄美
大学の誕生——琉球大学の設立とその背景	31
	山里 勝己
戦後沖縄における米国の英語教育計画と沖縄の反応	47
	石原 昌英
占領のメタファー——戦後沖縄における米国高官談話の認知意味論的分析—	69
	宮平 勝行
平和工作から親善活動へ——戦後沖縄とアメリカ—— 異文化接触の始動	99
	仲程 昌徳
1945年から1963年までの婦人会活動に見るアメリカ統治下の公的領域における女性 の領域	125
	喜納 育江
戦後沖縄における反米軍基地民衆抗議と近年の沖縄の女性たちによる トランスナショナルな反軍事運動 ("U.S.-Okinawa Relations through Okinawan Women's Activism: Local Struggles and Transnational Movements against U.S. Militarism")	155
	福村 陽子 Yoko FUKUMURA (History, UC Santa Cruz)
異文化接触の過程における沖縄環境思想史の可能性	171
	山城 新

II

異文化接触と食文化	197
	金城 須美子
戦後初期の沖縄畜産の回復過程と布哇連合沖縄救済会、 並びに沖縄復興布哇基督教後援会～豚と山羊～	249
	吉田 茂
GHQ統合データベースによる公衆衛生政策に関する政策決定の評価と可能性—沖縄 の戦災復興における政策評価—	271
	等々力 英美

戦後沖縄におけるコンクリート建築設計技術の適応 303
小倉 暢之

III

アジア系アメリカ文化研究の理論と方法における米国帝国主義——沖縄の場合
 (“U.S. Imperialism in Asian American Studies Theory and Method”) 315

ダレル・Y・ハマモト
Darrell Y. HAMAMOTO
(Asian American Studies, University of California, Davis)

(訳 山城 新)

『特別な事情により』: アメリカ占領下の日本——1945年から1952年における沖縄人
引き揚げ者たち (“For Compassionate Reason”: Okinawan Repatriations during American
Occupation of Japan”) 321

イーディス・M・カネシロ
Edith M. KANESHIRO
(History, Pitzer College)

(訳 喜納育江)

ボリビア沖縄計画移民の50年 (“Okinawan Bolivians in the Postwar Era”) 335

雨宮 和子
Kozy AMEMIYA
(Asian American Studies, University of California, Los Angeles)

米国の沖縄占領とハワイにおけるオキナワ・アイデンティティの形成 (“The American
Occupation of Okinawa and Okinawan Identity Formation in Hawai’i”) 351

ウェスリー・ウエウンテン
Wesley UEUNTEN
(Comparative Literature, University of California, Berkeley)

(訳 石原昌英・山城 新)

戦前・戦後の海外移民が沖縄にもたらした影響に関する一記録
 (“Some Notes on the Transnational Impact of Okinawan Emigrants on Prewar and Postwar
Okinawa”) 361

ベン・コバシガワ
Ben KOBASHIGAWA
(Asian American Studies, San Francisco State University)

(訳 宮平勝行)